

鴨川とその景観

京都府 土木建築部 河川課長 古賀 俊行

1. はじめに

鴨川は、京都市北西部の^{さじきがだけ}棧敷ヶ岳をその源流とし、雲ヶ畑を経て貴船川や鞍馬川を加えつつ南流し北山の山麓から京都盆地へと流れ出ている。その後、大原・八瀬を経て流れ下ってきた高野川が左京区出町柳で合流し、ほぼ真南へと貫流しながら四条大橋の北で白川を加えた後、伏見区下鳥羽付近で桂川に注いでいる。鴨川の流域面積は約207.7km²であり、流路延長は約33kmである。河床の勾配は、1/207と急であり、東寺の五重塔（高さ約79m）とその約8キロ北に位置する北山大橋とがほぼ同じ高さになっている。鴨川の呼び名の由来は諸説があり定説と呼ばれるものはないが、平安京造営以前から鴨川中流域に定住していた賀茂氏に由来するという考え方が一般的であり、賀茂氏の氏神である北山山麓の上賀茂神社、出町柳付近の下鴨神社にちなんで、高野川合流点より上流を「賀茂川」、合流点より下流を「鴨川」と表記されることが多い。また、鴨川の流路についてみると、出町柳付近で高野川と合流した後、真っ直ぐに南下し桂川に注いでおり、その流路は見事なまでのY字形をなしている。この流路について「鴨川付け替え説」によれば、鴨川はもともと現在の堀川あたりを流れていたが、平安京造営に支障を来すことから人工的に東側へ付け替えられたとされている。



写真一 鴨川（賀茂川）・高野川合流点付近の様子

る。しかしながら、その後の地質学的な調査から、現在では、平安京造営時には既にほぼ現在と同じ位置で高野川と合流し流れていたとするのが一般的である。

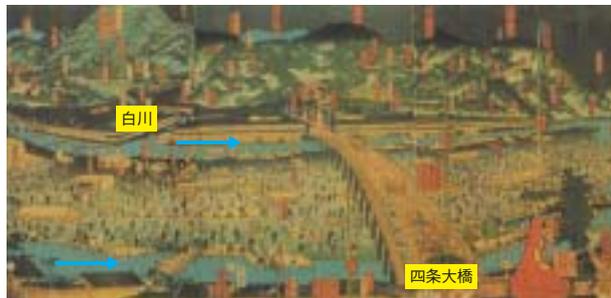
鴨川は、桓武天皇による平安遷都の際、京都盆地が四神相應の地であるところの「東の青龍」にあたるとされ、以来、「千年の都」の東方を流れ続け、その歴史、文化の象徴として、そして、なお、現代においても歴史都市「京都」の顔として、多くの人々に親しまれている。

2. 鴨川の歴史

鴨川の水は、古くから宗教的儀式に利用されてきた。上賀茂神社境内には鴨川の支流が「ならの小川」として流れ、さらに「明神川」と名を変えて神官の住家が建ちならぶ社家町へと流れ込んでいる。ここでは、各土塀の下の穴から庭に水が引き込まれ禊ぎに使われていたとのことであり、使った水は、再び明神川へと戻され、最後に鴨川へと還流している。また、下鴨神社でも鴨川や高野川の伏流水を御手洗池に集め、身を清める神事に使っている。このように、鴨川の水は昔から神聖なものとして尊ばれてきたが、その一方で、鴨川の上流域が狩猟地であり、捕った獲物を川で洗うなどしていたため、承和11年（844年）には、河川を汚すことを禁じる命令も出されている。さらに「続日本後紀」によれば、鴨川の河原で多くの人骨が発掘されたとの記述があり、鴨川の河原が埋葬地として使用されていたとのことである。

都の人口は、平安から鎌倉、室町時代までは極端な増加は見られなかったが、江戸時代に入ると30万人を超える人口となり、市街地は洛外へも拡大することとなった。この頃になると、鴨川の河原には、庭掃除や築庭を行う「河原者」と呼ばれる人々が住むようになり、この中から天才的な庭園芸術家である善阿弥が誕生した。また、鴨川の河原は都における数少ない広い空間であったため、人々の社交の場

として利用されるようになり、夏になれば川床を設け夕涼みに利用され、また、多くの店や芝居小屋が建ち並び、「阿国歌舞伎」が爆発的な人気を呼んだ。その一方で、鴨川の河原は、公開処刑の場にも利用されることになり、時の支配者が多くの群衆に対してみせしめ効果をねらったものとされている。



図一 江戸時代の四条河原

現在の鴨川は、昭和10年の大水害以来70年近く洪水被害が発生していないが、本来的には、平安時代の昔から氾濫を繰り返しており、暴れ川として恐れられてきた。このため、鴨川の治水の歴史は古く、築堤工事は平安京遷都時頃より始められたと言われており、さらに、朝廷は、天長元年(824年)、「防鴨^{ぼう}河^{かし}使」と呼ばれる治水専門の官職を設けて鴨川の治水対策に当たらせたとされている。また、鴨川の堤防を守るため、貞観13年(871年)には堤防付近での耕作を禁止する命令を出したとも言われている。しかしながら、このような対策を講じてきたにもかかわらず鴨川は氾濫を繰り返し、平安末期の白河法皇でさえ「賀茂の水、双六の賽、山法師、これぞわが心かなはぬもの」と嘆いたとのことである。安土桃山時代になると、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉により、洛中の中心部を囲む延長24kmにも及ぶ「御



写真一 鴨川沿いの御土居

土居」が建設された。この「御土居」は、政治的、あるいは軍事的な意味合いをもつとの説もあるが、鴨川の氾濫から市街地を守るという意味においては本格的な治水対策として評価されている。

3. 鴨川の改修とその景観

3-1 昭和10年の大洪水

鴨川における近代治水の契機になったのは昭和10年6月の大洪水である。昭和10年6月28日深夜から29日朝にかけて梅雨前線に伴う豪雨が京都市域を見舞った。この集中豪雨は日雨量269.9mm(9時間の雨量235mm)に達し、その間、時間雨量で40mm前後の強い雨が数回も発生するものであった。この豪雨により、鴨川のほか、桂川、天神川が増水、氾濫し、京都市全域での被害は、死傷者83名、家屋流出187棟、家屋全半壊295棟、浸水家屋43,289棟にも及んだ。特に、鴨川では、かろうじて破堤による被害は免れたもの



写真一 昭和10年大洪水(四条大橋付近)



写真一 昭和10年大洪水(三条大橋の流出)

の、鴨川に架かる多くの橋梁に流木が引っかかり、これに堰上げられた洪水が堤防から溢れ出し、死傷者12名、家屋流出137棟、家屋全半壊158棟、浸水家屋24,173棟のほか30を超える橋梁が流出するなどの被害が発生した。

3-2 昭和の改修

この大洪水を契機として、鴨川については桂川合流地点から終野堰堤までの約17.9km、高野川については鴨川との合流点から約5.2kmについて抜本的な河川改修が行われることとなった。京都府が策定したこのときの改修計画では、

- 昭和10年6月洪水の推定流量に鑑み、計画高水流量を650m³/sとする。
- 川幅を約70m以上とし、河床を2、3m掘り下げ、河道断面の拡大を図る。
- 堤防については、断面の確保を図るとともに堅固な護岸を施工して河岸の安全を図る。
- 橋梁については、流木の支障、橋桁の流出を防ぐために、桁下高を確保するとともに橋脚の根入れを深くする。
- 勧進橋下流の屈曲部については捷水路による付け替えを行う。
- 三条から七条間における京阪鉄道や琵琶湖疏水の地下化を図る。

などを基本的な方針とした。この改修事業は、昭和11年より開始され昭和22年に完了した。しかしながら、京阪鉄道や琵琶湖疏水の地下化については、戦争による混乱もあり実現することはできなかった。

3-3 平成の改修

昭和の改修により、鴨川の安全度は、昭和34年8月の戦後最大規模の洪水に対しても対応できるほど大きく向上した。しかしながら、この改修で実現できなかった京阪鉄道や琵琶湖疏水の地下化は、ある意味で、鴨川の治水対策上重大な課題であった。

昭和62年、これらが地下化されたことに伴い、暫定改修となっていた三条大橋から七条大橋にかけての河道拡幅が可能となり、平成4年から平成11年にかけて改修工事が実施された。



図-2 京阪電車地下化に伴う河川改修

3-4 鴨川の景観

現在の鴨川の河道は、先に述べた昭和、平成の改修を経て形成されたものであるが、その実施にあたっては、常に「景観」を意識した整備が行われている。昭和の改修においては、京都のもつ歴史的、文化的な価値、あるいは、国際的観光都市としての役割に鑑み、その市内を流れる鴨川が京都の情景に重要な役割を担っていることを踏まえ、治水上支障のない限りにおいて景観に十分に配慮することとした。これにより、例えば、コンクリートの露出を避けることとし、護岸は基礎部を除き石垣や玉石張りなどにより施工された。さらに、平成の改修では、「花の回廊」が整備され、川沿いの散策路を歩きながら、穏やかな鴨川の流れや四季折々の花木を楽しめる空間が新たに創り出された。「花の回廊」では、シ



整備前

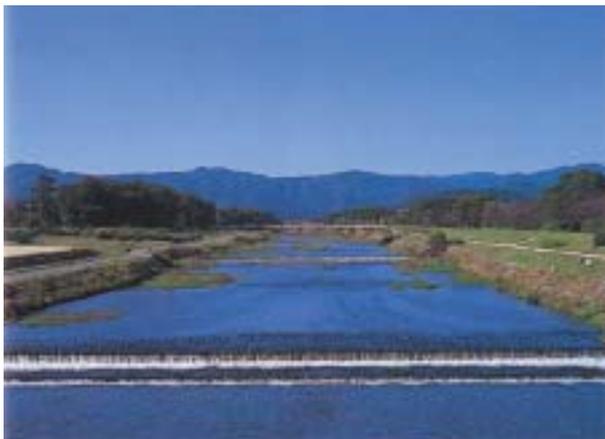


整備後

写真-5 「花の回廊」整備

ダレザクラをはじめとする里桜を中心に、モミジ、ヤナギ、ユキヤナギ、コムラサキシブ、ツツジなどが配植され、曲線形状を取り入れた自然石護岸と調和して、柔らかな景観を創り出すとともに、全景そのものが、東山から北山にかけてのパノラマ的景観と見事に調和し、京都という大都市における貴重な水と緑の空間として視覚的にも重要な役割を担っている。

現在の鴨川は、上記のような整備を経て形づくられてきたが、特に、市街地を流れる中流部においては、その流路はほぼ直線的であり、また、護岸は石で固められ、さらに、低水路には落差工がほぼ等間隔に配置されている、いわゆる人工的な河川である。しかしながら、大都市を流れる都市河川のもつ印象（景観）とは全く異なり、周囲に近代的なビル群を挟みつつも、遠方に見える山々と調和して、全体として心安らぐ柔らかな印象を創り出している。自然石を基調とした石積み護岸が、「花の回廊」をはじめとする沿川の花木に彩られた河岸と見事に調和し、さ



写真－6 北山大橋より上流を望む



写真－7 半木の道のシダレザクラ

らに、落差工がつくり出す静かな水飛沫が、視覚ばかりか、聴覚をも心地よく刺激し、鴨川の美しい景観をさらに高めている。鴨川の景観は、中流部だけをとってみても多様であり、「半木の道」あたりでは、春に霞んだ山々を遠景に、鴨川と対岸のシダレザクラのコントラストが鮮やかであり、夏に三条大橋から五条大橋にかけて見られる納涼床は、その前面を流れる鴨川とともに、夏の夕暮れ時の風景として有名である。



写真－8 夏の風物詩「納涼床」

4. おわりに

鴨川の魅力的な景観を創り出している理由には、「花の回廊」に代表されるような美しい花木の配植や自然石を利用した調和のとれた整備によっているが、また、鴨川が1000年もの間、都を流れ、その間、様々な形で人間とのかかわりを持ち続けてきたという歴史的な背景もその一つではないかと考えられる。さらに、現在でも、日々、多くの人々が鴨川を訪れ、川縁を散策している様子そのものが、鴨川の魅力的な景観を一層高めている。